

海外研修レポート

研修医 2年 射場 英明

私は、2008年6月にアメリカ合衆国のシカゴにある、Rush University Medical Centerに1ヶ月間の短期留学をさせて頂きました。

私は将来、整形外科を専攻しようと思っておりましたので、Rush University Medical Centerでは、整形外科分野の脊椎と関節を主に見学させて頂きました。

私は、英語が大の苦手でありまして、海外渡航歴は、英語圏ではグアムに旅行に行ったのみ。しかもグアムの人々は日本語が達者であったため、ほとんど英語を使わなくても良いという状態でした。従って、私の英語力は0に等しかつたのであります。

片言の英語を引き下げ、一人で海を渡り、アメリカ社会にもまれる・・・
海外で研修したいと思っはいても、私はそんな勇気を持ち合わせていませんでした。

そんな時、同期の同じく整形外科医を目指す加納先生も Rush University Medical Centerに短期留学に行くことがわかりました。

彼が、弱気な私の背中を押してくれたのです。

英語に自信がなくても、二人なら何とか助け合って行けると、加納先生と二人、アメリカ合衆国で研修をすることを決意いたしました。

シカゴまでの道のりは長く、成田空港から約12時間かかります。おまけにエコノミークラスであったため、トイレに行く度に隣の客に“Excuse me”を連発していました。私も国際人の仲間入りをしたかと思っはいましたが、シカゴに着く頃に隣の客が“いえ、どうぞ”と言ったことを覚えています。

6月のシカゴは気候がよく、一番良い時期でした。ちょうど日本の8月位の陽気ですが、湿度は低く、日陰は屋外でも心地よいものでした。従って、この頃のシカゴは観光シーズンで、市内のホテルは料金が跳ね上がっており、我々は中心街から少し離れた場所にある長期滞在型ホテルを予約していました。

ホテルから駅まで、シャトルバスで15分。駅からRush University Medical Centerまでは、70分かかりました。広大なアメリカ合衆国は、車がないととんでもなく時間がかかります。

そんな中、我々の研修生活が始まったのです。

私がお世話になったのは、Rush University Medical Center 整形外科・脊椎の教授でアン先生と、関節の教授であるローゼンバーグ先生でした。

アン先生は、川崎医科大学整形外科准教授の長谷川先生のご友人で、今回の留学プロジェクトは、長谷川先生とアン先生の御関係のもとに築かれたと聞いております。

長谷川先生は海外研修を始めるにあたって、シカゴと一緒に同行していただき、複雑

な病院手続をサポートしてくださいました。

アン先生の朝は早く、カンファレンスは午前7時30分からで、手術がある日は午前7時には手術が始まるというものでした。つまり、これらに間に合うためには、我々は毎朝5時に起床し5時半には出発しなければなりません。しかも、Rush University Medical Centerの留学生であるパス（証明書）を取得するまでは、OPE室には、同伴者なしには入ることが出来なかったため、待ち合わせの場所に間に合わなければ完全に逸れてしまう状況でした。その代り、仕事が終わるのは早く午後3時には誰もいません。

我々は夕方ホテルに帰ると、意味のわからない英語のテレビを眺めては、午後9時前には、知らずのうちにベッドに横たわり眠りについていました。

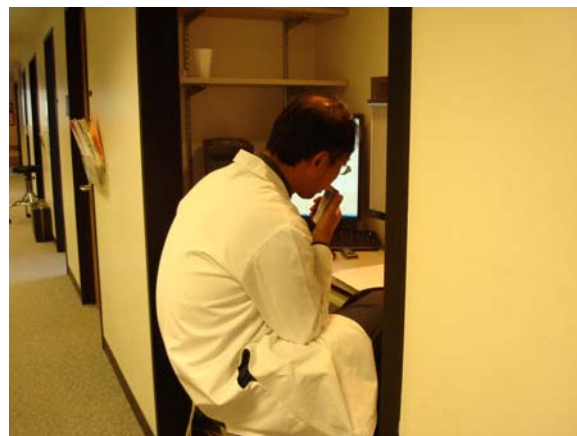
下の写真は、脊椎部門の朝カンファレンスです。レジデントが症例を発表し、教授たちが色々と指導しています。日本と違ってアメリカは、一つの教室に数人の教授（プロフェッサー）がいます。



下の写真は、整形外科全体のカンファレンスです。朝早く、会場の入口には軽食が用意されていました。皆、コーヒーやサンドウィッチを食べながら、ディスカッションしています。



下の写真は、アン先生の外来です。外来は個室が並んでおり、その中で患者が待っています。アン先生は、中央のデスクで患者の所見をテープレコーダーに吹き込んでいます。こちらでは、カルテは医者自らが書かず、秘書が後でテープレコーダーを聞き、文章化するそうです。医者の仕事は、診察し処置をするだけです。



毎週金曜日は、日本人留学生の生先方と共にアン先生の外来を見学し、指導していただきました。



下の写真は、関節部門のローゼンバーグ先生の大腿骨頭置換術の手術風景です。清潔野にはあまり近づけませんでした。ローゼンバーグ先生は、主要な部分だけに手を下すと、手術室を出て、別の手術に行きます。後は、レジデントが処置をします。



英語が話せない私に、**Rush University Medical Center**の方々はとても親切にしてくださいました。この1ヶ月間は私の人生において、大いなる財産となり、医師として人として成長するための糧になると思います。

皆様のご協力の下、無事に1ヶ月の海外研修を終えることができ、この機会を与えてくださった、柏原直樹レジデント教育委員長、プログラムディレクターの長谷川徹先生、角田司病院長、植木宏明学長、川崎明德理事長先生をはじめとする川崎医科大学附属病院関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

また、**Rush University Medical Center**の、アン先生とローゼンバーグ先生を始めとする関係者皆様には、大変お世話になり心より感謝申し上げます。